

腕神経叢ブロック説明書

腕神経叢は、頸椎（一部胸椎）から出て上肢へ向かう各神経が束になっている部分で、頸部の外側を通っています。この部位に局所麻酔薬やステロイド剤を注入する方法が腕神経叢ブロックです。レントゲンを見ながら行う方法、超音波（エコー）ガイド下に行う方法などがあります。

頸椎椎間板ヘルニア、頸椎症による痛み、帯状疱疹、むち打ち症（外傷性頸椎捻挫）などに施行される治療法です。

【ブロック前の注意事項】ブロック後に出血、感染が問題になることがあります。次の方は、治療前に医師にお知らせ下さい。

- ・血が止まりにくい
- ・心臓や血管の病気のために血液をサラサラにする抗凝固薬・抗血小板薬を飲んでいる
- ・ステロイド剤・免疫抑制剤を飲んでいる
- ・糖尿病がある
- ・発熱している
- ・薬剤、造影剤などのアレルギーの既往
- ・妊娠している方

【ブロックの方法】ベッド上で仰向けになり、痛い側の頸部から鎖骨にかけて消毒をします。レントゲンを見ながら（レントゲン室）もしくは超音波ガイド下等にて針を刺入しますが、この際、腕に痛みやシビレが走ることがありますのでそのときは医師に声をかけてください。針がよい位置に進んだら、局所麻酔薬等（造影剤やステロイド剤）の混合液を注入します。ブロック後、15-30分、安静にさせていただきます。ブロック後に腕がしびれたり動かなくなることがありますが、時間とともに回復します。（2-4時間）

【ブロックの合併症】

（神経穿刺）神経に針が当たり腕に痛みが走ることがあります。数日痛みが続くことがあります。まれに、痛みが残存してしまうこともあります。

（気胸）針が肺を刺したときに起こります。息苦しさがありますのでブロック後に呼吸が苦しいときは伝えてください。自然に治るものから、入院により胸腔ドレーンを挿入する治療を行う場合もあります。

（アレルギー）まれに、発疹。かゆみ程度から、ショック症状を呈する場合があります。アレルギーの既往のある方はお知らせ下さい。

（感染）非常にまれですが、感染を起こすことがあります。糖尿病、ステロイド剤、免疫抑制剤を内服している方は、その危険性が高くなります。

（出血）非常にまれですが出血が持続し、血腫（血のかたまり）ができることがあります。

合併症は、状況により入院、手術対応が必要なことがあります。

*合併症に対する診療は保険診療扱いとなりますのでご了承下さい。

*その他、疑問点や質問がある場合は医師、看護師にお聞き下さい。